座談会

戦争体験

（出席者）

森本　一善

昭和18年3月、20才の学徒として応召。第二国民兵として、第二師団に配属され、3月20日サイパンに上陸。米軍が圧倒的に強く、3日間で壊滅状態となり、生き残りの兵隊は、ほとんどが戦死。私は、ジャングルの中を逃げまどい、9月に米軍に捕虜となり、ハワイ、アメリカ本土を転々と捕虜生活をし、23年復員しました。

中野　嘉一

昭和18年3月、陸軍特別幹部候補生として、十名ほどの仲間と共に、陸軍病院に配属されました。1年間の教育を受けて、昭和19年1月、第二師団に配属されました。2月、中国の漢口に上陸。4月、中国の長沙攻撃の後、一名は戦死、残りは、ビルマ、ラングーンに上陸。ビルマ、ラングーンの戦闘に加わりました。戦争が終わってから、ビルマ、ラングーンの捕虜収容所に入れられ、2年間、ビルマ、ラングーンの捕虜生活をしました。

高橋　功

昭和18年12月、陸上予科第一期生として、海軍兵学校に入校。昭和19年3月、海軍兵学校を繰り上げ卒業。すぐ、軍艦「榛名」に乗組。1年間、海上で、ずっと、ビルマ、ラングーンの戦闘に参加しました。1年間、戦争をしてきたのに、戦争は、終わってしまった。戦後、ビルマ、ラングーンの捕虜収容所に入れられ、2年間、ビルマ、ラングーンの捕虜生活をしました。

梅原　千治

昭和18年、陸軍特別幹部候補生として、第二師団に配属され、陸軍病院に1年間教育を受けました。1年間、戦争をしてきたのに、戦争は、終わってしまった。戦後、ビルマ、ラングーンの捕虜収容所に入れられ、2年間、ビルマ、ラングーンの捕虜生活をしました。

浅田　晃彦

昭和18年3月、第二師団に応召。第二師団に配属され、3月20日サイパンに上陸。米軍が圧倒的に強く、3日間で壊滅状態となり、生き残りの兵隊は、ほとんどが戦死。私は、ジャングルの中を逃げまどい、9月に米軍に捕虜となり、ハワイ、アメリカ本土を転々と捕虜生活をし、23年復員しました。

長洲光太郎

昭和18年、陸軍特別幹部候補生として、第二師団に配属され、陸軍病院に1年間教育を受けました。1年間、戦争をしてきたのに、戦争は、終わってしまった。戦後、ビルマ、ラングーンの捕虜収容所に入れられ、2年間、ビルマ、ラングーンの捕虜生活をしました。

聞き手

90％以上が戦死

長洲　戦争については、昭和、本誌の第十三号、八月号で海軍の回顧のものが「戦争体験」の座談会をやりましたが、その後、終わっておりまして、戦争体験というものがだんだん失われていく。それはそれで当然で、あるいはもう忘れてしまい、戦争を観念にしか知らない、「戦争を知らない子供たち」の方が、世の中に多くなっているとまずかろう。それを次代にどういう形で残すかというのはわれわれの責任ではないだろうかと考えて企画いたしました。たまたまテレビでは初年兵部隊ができたとはいえ、なお毎日、人が死んでいくというとまずかろう。ただあの戦争がくだらなかったかというだけの話でわれわれの体験を残らせてくれるようにと思います。

今日お集まりいただいた諸先生は、諸軍で激戦地を回ってこられたお方ばかりで、かつて文学にも深い関心をお持ちですから、戦争は誠とか戦争文学とか、いまの自分とのかかわり合いなどお話を聞かせていただきたいと思います。

最後を飾りますが、みなさん法律学校という

うところを、学徒というべきなんでしょうが、生き残ってこられたお方ばかりですね。そしてみなさんはすでに作品を書きになっていらっしゃいますが、ぜひ、これを書きになったんでしょうか。中野先生はメレヨン島ですね。

中野　そうです。

長洲　メレヨン島は、サイパンからどのくらい離れているんですか。

中野　そうですね。サイパンからざっと六百カイリくらい離れた海域です。南北約三百カイリくらいかかって囲いたんです。メレヨン島は海保群島西カロリン諸島の一環でして、平坦な島です。海抜1メートルか二メートルというのができていまして、これまでもメレヨン島の生活者、通常族の話で想像はつく程度しかこもありました。朝日新聞社から「メレヨン島生と死の記録」という本も出まして、わたしの書いた日記も載っていますが、誰がへったとか食べ物のことばかり書いてあって今見ると恥ずかしい気がしますね。戦後大分たってから「メレヨン島物語」という書物を一冊出しております。

長洲　梅原さんは、ニューギニアの東のほうに行かれたんですか。

梅原　西部のほうはオランジアを捨てにしてオランダ領で、私のおりましたのはオーストラリアのほうで、結局、取られてバターイ行ちとなる恐れ通がなくなりもったのがわれわれの誇で、右へ行っても、左へ行っても、敵ですから、お前は逃却と逃亡になるといわれてもどっちも敵ですから何が逃却で何が逃亡だかわからないような場所でしたが、とにかく食べものというのはなかったですね。しかもものを食べないで、あっちを向かろ、こっちを向かろと命かされるもんですから九十月パーセントは体行きが倒れじゃなかったかと思います。

私達がよりやく自活に入ったのが、昭和十九年の九月なんです。その九月から二、三ヶ月間に非常にたくさんの兵が死にました。アダンターシャのできなかったんでしょうか。十九年の十二月には、軍医はわたしと一人、病人は三十人くらいかな、軍医の難民なんて全然しないで、毎日蛋白の注射をやってたわけです。ところがジャングルの中というのは、全く犬が居ないんですね。こっちも栄養失調のためもありますが、犬の肉が絶滅しているものですから、ネコ一つでは腹を切れない。一つの穴を掘るのに一日かかって、やっと埋めるとその次の日また一人死ぬ。使うべき薬は何にもない。十九年の十二月は、猛烈な十二月だったんです。そのあと同じような状態が続きました。

凄惨！　硫黄島

長岡　森先生の硫黄島の苦労も筆舌に尽くし難い体験でしょうね。

森本　わたくしは硫黄島へ上陸をする前に、島の小さいことに驚きました。歩きわたしゃ良いところで四キロ、狭いところで六キロ、軍がこの狭い島に二万、海軍が六千おったわけです。そして最後に生き残った数というのは約千名。ですから二万五千人が戦死したわけです。わたしが行きました時はまだ島での戦争が始まる半年前なんですけれども、防備が全くできてない。もうヤイバンは陥ちてしまっておるのに、それでわれわれを陸してから準備を始めたが、硫黄が出る島ですから、いわゆるというのがない。土質岩と聞いておったんですが、岩のやわらかい海星の土質でなかなかスコップでも掘れないんです。工兵隊の指揮入が一日掘っても二メートル、われわれ一千人の四時間掘り続けましてもまあまあやっと一メートル近く掘れるという程度で、敵が上から撃ってくる前に空襲と艦砲射撃に備えるべく、砂浜のあい間を見て一生懸命掘をつくりました。初ののうちはそれほどの爆撃はありませんでしたが、十九年の十一月以来というものは、一日に千七百くらいの爆撃があり、昼で仕事がほとんどできない。小さな島ですから島全体が取り囲まれて、一日中ボンボンやられる。艦砲射撃っていうやつは音と行けばものすごいんですけど、爆撃はどの艦ではない。空爆は、初ののうちは二百五十キロの爆弾でしたが、段々進んで艦砲の爆弾を落すようになりました。二百五十キロのすり鉢型の穴があく。穴は五メートルぐらいにもなりますので、今まで掘っていた壕が役にたたず、それから六体三十五メートルくらいに掘り直しました。そのうちかもめ隊では患者の収容ができず困って、工兵隊に頼んで兵員と収容の指示の例況をこしらえようとしたんですが、これがまたなかなかはかどらないんです。どうしても患者を一部外に置かなくちゃならん。そこへクタ人種の慰問隊でも来られると、パーッと光が広がりまして、患者が火

だるまになって、出しまぎれにパーッと四、五十メートル駆け出して、そこにバッタリ倒れてしまうんです。悲惨でした。

もう一つの悲惨ということは、大きな迫弾が落ちると、地下に埋めてある弾薬庫が一度に爆発し、そこら辺にいた兵隊は全部天に吹き上げられちゃう。天の柱と同時に、人間がバーッと天空に飛び散るのです。しばらくすると腕とか、身体とか、足とか音物が、バラバラになって落ちてくる。これがまことに悲惨でどうにもしようもない。その時分には青ッとしたのは一つもございません。初の日は青ッとしたこの死、タイヤの木の島でございましたけど、それが全部なくなって、焼けた地肌が残っているだけです。そこへ兵士の手だのが降下がるのです。そのそばは実に筋を解うばかりでした。

しずかには地獄絵ばかりでなく、地上の生きものという生き物を皆殺しにするために、絨毯爆撃というのを落としてきた。これは上空爆撃し、山の裏に隠るんだ。地上のあらゆる人間を殺傷し、地獄を殺すつもりだったのでしょう。

食べものの話がでましたが、ネズミやいろんな動物をみなたべはあったらしいんですけれど、硫黄島にはそういう生物はおりません。土質が硫黄を含んでおって、熱を持っておりますから、地下にできる野菜、または果物のようなものは全部駄目なのでございます。魚類近くもやってきましたが、みんな原爆にやられちまう。パパイヤの根だとか、バナナの根だとか、主にはそういうものを食べましたが、ず刺を起してしまうこともしょっちゅうあるのですが、あそこは井戸が掘れませんで、天水を待つほかない。二週間分の水をためておけという命令がありましたが、この二週間というのは、二週間の二つ丙地から救援がくる。それでがまんしようというんです。もちろん二週間たってもこないとき。

梅原　硫黄島は無防備だったというんですが、どうして誰いんはそんな所に兵隊をたくさん来のたんですか。

森本　これは二次平洋の防衛ではないと、つまり首都の安全のためであるというような。

梅原　飛行場を設定するのに、たいへん地の利を得ていたのでしょうか。

森本　向こうにとってはね、日本の飛行機もまだ敵が上から来るのには百機くらいありましたけど、しまいには一機もいなくなってしまいました。食べものもそういうわけで、しまいには三十五日間くらいは全部何も食いませんでした。

長岡　それでも生きてられるんですね。

森本　生きてますね。生きまあれば ね。ョ ンプ予分の水を一日盗んで配給していた。もちろん海ヤクのほうはたがヤクのわいたようなかんづめが、それでもないようでしたんです。もう口の中はペッペッとね。まだその時には乾パンがあったんですけど、乾パンが口を下っていかないんです。水がないのがとてもつらくどぎいました。

ところがしまいにはわれわれの壕の入口が埋まってしまい、その入口に二百の慰問袋が置いてあって、皆を出すパッパッとやられちゃう。最初わたしの壕には入口が七つあったんです。それを最は一つのだけ残して、あとをふさいでしまうんです。これは苦しくて苦しくてね。中には熱気がこもってね。

長岡　相当の暑熱だったという話ですね。

森本　壕のとこ熱帯で大変あるけ。すると またすぐふさがれちゃうんですよ。そこへ神 ってる新聞がみたいなのを投げ込んでくるのです。これは苦しかったですね。ラ

ヲ言ッテ済マンシテおんのです。ガスハなかなか出ていかないんです。穴がないから。

そこへ隣の壁から逃げてきた兵隊がいまして、「誰見さん、おいへんですよ。隣の壁は全滅しちまいました！」どうしたの！ってみたら、ガソリンを壁の中に注ぎ込んでまして、それに大弾丸射撃で火をつけて、その壁の中を火事にしちゃって、みんな焼き殺そうというんです。隣の壁はそれで全滅してしまいました。あしたはこの壁へきますよという。きょうの晩は、みんなで分隊をして、何とかこれを防がなくちゃいかん、一計を案じ壁の中へ土嚢をつくって、上に戸板を乗せて、そのうしろに列車でかちんとあった毛布を乗っ下げまして待っておった。そうしたら敵がやってきたんですね。ガソリンは土嚢の前でみんなたまってきた。ガソリンは土嚢の前でみんなたまってい、わけです。それに大弾丸射撃で火をつけてきたが、パーッと燃えたことは燃えたんですけど、奥は全部外へ向っていって、中へはこなかった。それでわれわれは助かったようなわけです。その他爆弾を投げ込まれる、迫射砲で入口から撃たれる、まだいっぱい死んだのはいますけども、あたしは一べんも撃ち込みに兵隊を出さなかったんです。敵さなかった。撃ち込みに出ても、向こうの人間を一人も撃ったことができない。自分は機関銃でやられちゃう。自殺に等しいから、おまえら出ちゃいかん、みんな死んだふりをして、大きな声も出すな、そーっのとして息を殺っていろっていうんですが、真剣の中にいると気ちがいになりやすい兵隊は、気がめいっちゃうんですね。そんなとき誰、どうも女の話やなんかしてもだめなんですな。食いものの話をするのが一番いいんです。（笑）そうやってみんなを慰めていた。それでも苦しい、苦しいというって自殺するやつが出てきました。しかしみんな最後のために手榴弾を一つ持ってるでしょう。その手榴弾を自分に投げかけるんですよ。ですから死にたいやつは、向こうのほうへいって死ねといって無駄にしておったわけなんですが。

いま思えば、一番苦労したのは、兵隊を如何にして納得させるかということ、死に性日本の軍の教育に、降伏ということはないですから、二十二、三の若い連中は、軍の教育が骨の髄まで身にしみてますからね、ですからこれを納得させるのに、三日三晩かかりました。死ぬのが目的ということについていろいろ討論をしましたな。おれは将校でもなければ、おまえたちと同じである。おれを殺したいと思ったら殺せ、おまえたちに殺されるんなら文句はないんだからおれの話を聞いてくれというわけで、三日三晩ものも食わず寝もやらずに話しましたな。これが一番つらうございましたね。

どうしてもいうことを聞かなかったのが三人いました。この三人は、非常にいい兵隊でした。利巧でしてね。そのときはわれは西方を向けばすぐでおりましたから、だいぶ考え方が違っていたのかもしれません。その三人は自決してしまいました。惜しいことをしました。在方がない。この野郎別荘は解散しようう、おれについてきたいものはついていこいうんで、まア最後は…。

敗走と死

中島　これはわたしのメレヨン島での最後的な体験ですが、那覇大本営の防衛軍の中で生き残りになりまして、約二十日間飢餓状態だったことです。防空壕といっても、ヤレの丸太でつくったもので、幅員一メートル半くらいの高さですから腰水がいっぱいでした。その

時は満ちの島から工兵隊の力ある連中が組織を起こしてくれまして、命をとりとめたのです。ふと目がさめてみると、変なベッドの上に寝せられているんですね。サシの薬っぱが顔にふさがっているんですね。重症の負傷と診断されたが、約半月くらいはとにかく意識がもうろうとしておりまして、おそらくその時間設でも調べたら、かなり変化があったんじゃないかと思うんですがね。（笑）

長洲　しかし後遺症はなかったですね。（笑）

中野　おかげさまで。でもあったかもわからないです。一時は発狂されたかもしれないともあったから。（笑）

長洲　高橋さんはインパールのあの作戦に行かれたんですか。

高橋　ええ。いま伺ってると、何かわたしそんなに苦労してなかったような気がするんですね。やっぱり野戦病院というような形で動いておりまして、第前にそなかったわけですから。わたしが戦争体験で思いたことは、やっぱり今回の戦争では、戦傷が三分の一ほどかったんじゃないでしょうか。戦病が多い。わたしたち死ぬこと何とも思ってなかったけど、ほんとに自殺などとしゃないですか。戦闘しない戦争なんて、こんなばかなことないですよね。ナンセンスですよね。戦闘間に死ぬんだったら、戦死を覚悟しているのですから何でもないですが、戦争もしないで元死すると――なんて、そんな戦争はどのコーマクなしにやないですか。（笑）

それからあのことが出ましたけれども、わたしたちの部隊は野戦病院ですからあまり面白なことはなかったけれども、ビルマの山の中で雨が三日おかった。これはほんとにしようがないんだな。（笑）砂糖なんていうのは、ぜいたくこのとないもんですよね。ほんとに塩がない。ノイローゼですね。

森本　壕から出て来た時、食パンをもらったが、食パンがあんなに塩からいものだとは思わなかった。

梅原　自分よく思いんたちにゴーヤチャンにもたくさん生き残りがいるだろう。小隊部少尉とか、機関銃さんみたいな人がかなりいるだろうって聞かれるんですが、私は覚えていないだろうと思うのです。山に逃げたら寒がなくなるでしょう。ですからどうしても海岸とか島とかなら生きられるけれど山奥へ入ったら岩盤でも見つけない限りは、とても生き残れない。

高橋　ガダルカナルと違を岩にして出が沈まれてきて、そのときにわたしは、死ぬことは何ども思わなかった。一強死生という気持がみたせいか、全然恐怖感もなかったんだからいいなァと思いました。（笑）

梅原　それはぼくも感じました。

長洲　彼がおりますね。知っているのは自分だけが助かるっていうわけにいきません。ボボンといくら、全部死んで――。敵兵がこっちへ来ようともんです。（笑）

高橋　部隊はビルマでたくさん負け戦をしました。逃われる気持ちっていうのは、長話をきっていう感じで、やりきれませんでしたね。いつ捕虜になるかわからない。日本では捕虜の教育はしていなかった。だからもう死ぬとほかないわけです。

梅原　捕虜部と負傷兵みたいな感じの違いなんですよね。ぼくはどうして海軍を志願しなかったのかなァと同感と思いました。このまま捕と死にするなら、同じ死ぬなら死ぬ前にまでビール飲んで死にたいなと思いましたね。（笑）

長洲　われわれ、大河内さんの「ハイカ俳句」とか「野天」とか読み返してみたんですが、

あおいう感じは陸軍にはないんですね。逃げて逃げて自分一人になってみたり、そういう感じ、陸軍はそういうことは心得いっていえば心細いでしょうね。

高橋　ほんとにピルヤは、それがせつなかったです。

森本　わたしはあべこべで、輸送船で行きまして、すくすくとなまの実弾で敵の潜水艦どうしが話をしているのが聞こえるんですよ。魚雷はくる、ロングボンに船を売らせて気が気ではない。狭い船の中をかけずり回って、ボヤっくれば死んじゃうんだし、死にゃやこしたれ。まァみんな一緒に死ぬんでしょうけど、かつおぶしを一つ渡されて、軍刀は竹にゆわえつけて、いかだをそばに置いて待機しているわけだ。いやな気持ちだった。あれは笑われたしは「あッ変な輸送船」っていう歌を聞くのがいやになりましたね。（笑）

連合軍のマラリア作戦

浅田　みなさんらのすごい体験を話てこられたわけですが、わたしはそれに比べてラバウルで電話当番が長かったというもの、食べものはどうにか現地自給できて、飢えたという経験はありません。結局、わたしが軍医部員として一番悩んだのは、マラリアの問題なんです。電話が三年も五年も続いたとき、マラリアの薬をどうするか。そのために何とか薬なしでマラリアにかからないようにすればそうくる。今から考えるとこういう努力をやったわけです。とにかく蚊に刺されないようにせよということで、外出には帽子の実の編機で作った長靴を頭にすげかえることにしましたが、そんな暑くらいでは蚊は逃げやしません。ジャングルの蚊が血に飢えていることは確いものです。立小便をしている間にペニスを刺されます。だから便所には防虫を備えつけておいて、バタバタ尻を振りながら用を足したものです。防虫剤と称して煙状のあの検査をしたり、出入りの商人や労務者にもやりました。ある意味では「不動の資格がないと」と蚊が来たら通ってよろしい」という協合令を出しました。

それから現場の指揮でマラリアに対くものはないかということで、パイナップルの葉っぱとかヨウケイの新芽などを煎じて飲ませた。しかし効果がキニネに似ているだけで全然無効でした。アテブリンに色が似ているということで黄色天薬が有効だという話もありましたが、病れる者が薬をかじり心理で、結局、患者がどんどんふえるばかりでした。終戦後、ラバウルはオーストラリア軍に占領されたんですが、アテブリンを大量にくれたんです。そのアテブリンは結果がレールの話になっているんですね。ぼくはあれを見て実に感心しました。われわれが持ってた病薬なんてものは、毒殺の検査薬ですから、全部ペケりになって飲まない。

もう一つ感心したのは、戦年は熱帯地で暮らしているんですよ。DDTを飛行機で撒いてあるからその辺一帯は蚊がいないんです。それを聞いたときはギャフンとなりましたね。これにヤラリア作戦から見ても負けるのが当然だと思いましたね。

古兵軍にもらったアテブリンを毎日三錠ずつ飲ませた。患者がバタバタとなくなったがいましたが、やっぱりマラリア作戦も衛生の問題です。そういうことを日本の首脳部は、南方作戦を始めるに当って考えなかった。武器弾薬以上にマラリア病が怖ろしんだ。ジ島の作戦でも、マラリア病を台湾に持ちこんでやったらあんな悲惨なことになるかったんじゃないでしょうか。飢えで死んでいるものは以上にマラリアに苦られて死んでしまったというのが多いんじゃないか。

梅原　もう一つ下痢がありましたね。下痢はアメーバでしょうかね。栄養失調になるから下痢するということもあったかもしれませんけども、とにかく下痢ではさんざん苦労しました。むくんじゃったですね。

浅田　マラリアでもヨレヨレよろの下痢を起こすことがあります。

中野　メレヨン島では非マラリアは安然なかった。主にデング熱とアメーバ赤痢でした。アメーバ赤痢は、昔から軍隊に多いであるようにホメチンがよく効き、これが割合にあったから助かりました。デング熱というのは私もサイパンから海軍船でメレヨンに行く船の中で三十九度の熱にうされていましたが、ナスビリンくらいで治りました。

戦争の真の姿を伝えたい

高橋　わたしは戦争文学に花鳥を申し込みたいの。戦争文学の中には、戦争の記録ッ、なくてイデオロギーのための作品が多く見られます。戦争はイデオロギーなんていうものじゃないんですよ。

長洲　どうもわたし読んでも、納得しかねる点があった。軍部の生験の実感風小説があります。

中野　メレヨン島の場合は、遠藤の方が、当時文芸春の受賞新説に出した手記によって評校はいいことを出して、兵隊を慰撫したとか食糧を独占したといったような残酷行為事件が大分問題になったことがあります。いろいろ出て来ていますが、メレヨンの感覚はたしかに去年作戦中の報道であったといえます。

長洲　いろいろな小説に出てくるように、戦争の主題は軍隊としての兵隊というものは崩壊したとそうですが、いかがでしたか。

梅原　戦場における残酷の問題に、やはりある人間因果というのがあったと思います。兵隊は一応保されていたけれども、パッレーブ島既に、ないようなはずいぶんあったんじゃないでしょうか。たとえば飢えてる将校に水も食料も持って行かないとか。また「薩摩の中の人間」というドキュメンタリー報記で大宏賞とられた尾川さんの書かれた中にも、ファルチル山頂部をとるときに、将校の元内って一二三って言葉にしたことが書いてありますが、絶対にないとは言えないと思うんだ。

高橋　それはわたし軍部の組織そのものにあるんであって、戦争そのものじゃないと思うの。戦争ってやなくて平時でもあるんだから。わたしは軍隊そのものにすでにそういうヒューマン・リレーションがあったと思います。だから戦争でそれが極分後をされたかもしれないけれども、それ以上に軍隊事務の部分されていた所が多かったじゃないですか。だからわたしは、負けが勝ちだと思うの。軍部の実の戦争で日本は負けてませんよね。今度のトナム戦争を見ると、アメリカは負けているじゃありませんか。だから戦争って、力や物量が物を言う、なんていうものではなくて（笑）戦争やっちゃだめだということですね。戦争には負けるも勝ちもない。戦争は勝負ではない。何としても戦争をやめてもらわなくちゃと思う。

もう一つ、わたし言いたいことは、反戦という言葉ッ、戦争反対ッ、ちょっと違うんじゃないでしょうか。反戦というとイデオロギーが出てしまう。戦争反対というと誰でもいわけです。反戦というのは、ある一部の人がいうことのように思ってもいいんじゃないですか。反戦というイデオロギーの場に戦争が使われた戦争文学は、ずいぶん違うような気がするの。そういう意味でわたし

は、戦争文学、好きしくもあるけれども、あれで戦争というのはこうだと思われるんじゃ、戦争という学問が出きます。わたしはそんな気がします。いまテレビでベトナム戦争の場面が出てきますが、あんなのはスポーツですよ、全く。

長洲　そうね、たしかに兄貴は一つの実験のようなイデオロギーですよ。

森本　あんな悲惨の中でアメリカは、ボーッと思って笑ってる。日本人はもう気違いになってる。アメリカ人は日本を炊いて戦争をブラブラさせながらやってきたり、ワーッとおどせば、サーッと逃げるし、まるでスポーツをやってるような気分でしたね。

浅田　戦争ものに対する考え方というものが、本当、長洲、そういう連合国と日本とは、非常な違いがあったんでしょうね。

森本　彼の中へホをたのでおいた。その水を世でもって炊んだ世界がいる。そうしたら兵隊たちがおこりましてね、そんな非常識しもやえるということで、まっようやく何とかなだめましたけれども、後段においては驚きに、人間の思いとこころもいいところも現われてきますね。

高橋　これは軍隊にかぎらないですね。

森本　そうかと思うと、そこら辺で出ってきた小さなたばこを飲み合ったりね。

高橋　ええ、ええ、やっぱり兵隊とか、そういうのが、まだまだあるわけなんでね、自殺感だけが戦争に伴うんじゃなくて、その異様なものが戦争文学にはあまり出てない。

長洲　軍隊ではお粗いというのは、小説家の罪の深さが原因ですよ。

森本　テネシーワルツ弾き合いしましたときに月に出て、砲弾に流れておりますから、あそこにはスメダは一羽もおらないんです、全部メジロとウグイスなんです。

長洲　ずいぶん気使な……。（笑）

森本　ダンダン、パタパタパタ銃砲の音がしてる中で、ホーホケキョと啼いているのです（笑）。これは非常にいい心地でしたね。（笑）

高橋　わたしもそういう印象受けたことがあるの。昭和十六年かな、陸軍病院を慰問して中支部へいったんです。雨日です。雨一緒ですよ。まだたいへんだろうと思っていったら、大敗ところじゃない。やっぱりウグイスが啼いている。（笑）あア第一線って、こんなものかなと思って、驚いて帰ってきたの。日本内地じゃ聞いてるのと違ってしまく、とか銃砲に慣れていないけど、戦場にヤウグイス。

梅原　内地における銃砲とはちがって、戦場ってこんなにいいとこかなって思う銃声がありますね。（笑）とにかく弾が飛んでこなきゃいいんだな。（笑）

長洲　ある銃声というのはありますね。あたしも第一線の陸軍部にいたんですけど、やっぱりウグイスの声で夜明けがさめるんですね。そういう長閑な時代があったような感じっていうのはあるもんですね。戦から離れているときでもありますよ。何も銃砲だけじゃない。

梅原　かえって銃砲の中にいるので、ホッとしたオアシスに入ったような錯覚があるのでしょうね。何かそういう鳥の啼き声なんかが、何だか平和感というか、そういう言わくいがたい感情、ヤンキサンをさそうのでしょうね。

高橋　かえって戦場の味うがね、日本内地の味うが聞ってんじゃないかなって、と思ったことがたびたびありましたね。

捕虜

浅田　森本先生、恐縮を承いて投降された

わけですね。部下が死んだら家族がどんなに悲しがるだろうと思われた、というんですけど、そういう発想は、当時の日本人になかったと思うんですけどね。むしろ死んだほうが家族が喜ぶ、そういう観念に支配されていたはずなんですけど、その点非常に進んでいるというか。（笑）

森本　結構たばかしの兵隊が二人いたんですよ。これはどうしても捕虜にしてやりたくてね。わたしは、この家族も内心は、ほんとのところは死ぬのを喜ぶとは思いませんでしたね。

浅田　しかし、いわゆる銃後の「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず……」というあれですね、あれを長閑にも、従事しているわけでしょう？

森本　そうです。しかし、それを引張したわけです。それで三日ばかりかかっちゃったんですよ。

浅田　でも三日かかって、よく説得されたと思いますね。いのちがけのことだったと思いますね。

森本　一番うれしかった、あたしは、ほんとうに泣けましたね。

浅田　わたしは、もう戦争はごめんですけれども、もしかまたするんだったら、その時に国際法というものをよく教育して、それから戦場に送り出すべきじゃないかと思うんです。

森本　軍部だって、万国赤十字条約は教育されませんでしたかね。

高橋　わたしたちも、教育してたね。

浅田　われわれは軍部でも、軍刀持って拳銃持って、それで出張したわけでしょう。ラバウルでは軍部といえども、敵の戦車がきたならば、戦車像音持って突っ込むという命令になっていたんです。そしてまた負傷兵ができたら、その場で自殺して、絶対うしろへ、安全な後方へ下がっちゃいけないっていうんですね。リックサックと弾薬の荷負を入れて、それで第一線に出ていくのですから、何だ、これじゃ軍隊でないほうが得だと思った。（笑）

森本　陸兵のいうようなことになれば、国の意思は「捕虜の恥」という感覚をつけられる、とても国にいられるもんじゃない。それをどうしてくれるというような雰囲気にはありました。これは軍隊にとっても捕虜にとってもたまらない悩みのようでした。しかし私はそのような結果には陥してならないと確信しておりましたね。というと日本は負けるということを兵隊にはいえませんでしたか。

長洲　先生は一時戦死になっていたわけでしょう。

森本　一時戦死です。部隊でもって捕虜したのは、わたしの部隊だけなんですよ。（笑）ですから、悪くいわれたこともありますね。部隊長はいろいろ、軍隊の上だったんですが。

中野　わたしら民間に応召されて名古屋から サイパンまで二週間だった見習士官の軍医で 野戦病院に残った田軍医という私の戦友は 戦後十二年経った昭和三十二年頃、ひょっと 私を訪ねてきて私をびっくりさせました。 彼がどうしてあのサイパンから生きて帰って きたのか？　というよ。岩田君はほげしい強 撃に会って人事不省になって捕虜入り口で 倒れていたのを米軍に助けられたということ で、ほかの日本兵もそんなふうにして助けら れた者も多数あったという。その時のことに ついては彼はあまりしゃべりたがらなかった。それから、戦争はハタチ、それからチャ チャスまたヴィヌンレンの収容所に入れら れていたという。チキサスでは森林伐採、材 木運搬など使役に使われていたということだ った。とにかく投降する者がなくて、安藤 不明のうちにつかまって連れて行かれたもの が数百名の話でも、約百たくさんあったよう ですね。金沢出身なんこで、三百人とか。岩田 見習士官も戦争がすんでアメリカから帰って きたときは仕方で帰ってきたこと、多くの 死んだ人々に対して済まないという部隊全滅 が無かったらしく、ひどいノイローゼの状態 でした。

森本　われわれの仲間でも、そういうのが いますね。全戦人中に出ない。

浅田　わたしは捕虜になった人達人会い をしたけれども、やはりやにはいまだに自分 の子供に、自分が捕虜になったということは いってないという人がいますね。テレビなん かで記録映画が写るでしょう。お父さん、あ のときどうしてたんだというわれわれの非常に つらいと。

梅原　ですからやはり樋井さんの「知ずか しながら」っていう言葉ひったりする感じが するんですよね。なんだか戦友にたいし、自 分だけよいことをしたっていう気持を感じなんで す。

戦争を知らない世代に

長洲　話は尽きないんですけれども、最後 に、わたしたちは戦争の話っていうのは、拝 きっていうとたいへん語弊があるすけれど も、やっぱりね、子供たちとの間に断絶とい いますか、おやで、まだ戦争の話かというよ りなこと、みなさんのところではいかがでし ょうか。自分の手柄ばなしやなくて、小説 を読むにしても、映画を観るにしてもレンバ ショがあるんじゃないでしょうか。

高橋　戦争の体験者で、話で戦争を回想し ている人の戦争観は違いますからね。

森本　我々話しても体験者でなければわか りませんよ。

高橋　ただ、わたしは今度いた記録「あ ミ野戦病院の記録」は実況の方が読んでくれ て、みんな自分の夫や兄弟の伝が、ああいう 体験をしたということを思い出してくれて ありがたかったというのが多かったです。だ からやっぱり戦争の記録は残しておきたい。 けれども、イデオロギーのために、その記録 を一方的にするのは、いかに文学的といって も、ヒューマニスティックには、同感できま せん。イデオロギーを論ずることに戦争を利用 しちゃいけない。反戦と戦争反対とは違う ということです。

梅原　ぼくのところはその子二人で戦争に は無縁ですけれども、しかし、ひょんなこと で登場をしたりするときに、子供の思う言葉 で不思議に思うことは、一つの時代、幸福 だったわけというのがあります。いまは アタッチにしろ、バッシングにしろほんとに命 をかけてやることがないんだな、何かから学 へ入らなきゃったらあとはもう出路がない。だ

から「軍人幸福だわねえ」という。彼女達え が逆って来てぼくを驚かせるのに、あなた が、いまの学生たち見てましても、結局、平 和平和っていうけども、これ以上の平和はあ りようないのにまだ平和、平和といって騒 している。平和は維持しの種であって、シン ボルにすぎないんです。戦争すること自体に 意味があるのだと思う。平和のために戦争す るのは、日本帝国だって同じようなことをい いましたね。「東洋平和のためならば」とね。 この頃のように国際未来を書われちゃった ら、もっとすごく、われわれの生きた時代 の方がこわかったけども、生命の重りや若さ の象徴ができたのかもしれないと思うときも ありますで。ぼくが戦争にいく前の日記に、 「あッこのもやもやしたものを発散するため には、戦争もまた必要である」と書いた一行 があるから。

浅田　それを変要というふうに解釈してい いかどうかですね。自由に考えることが許さ れなかったから考えられたものを一度に考え ていたわけなんで、結局、一つのパターンが あって、それなりすぎに考えていればそれ でよかったわけなんです。変要といえば変要 ですけれども、やっぱりそこに自分というか 主体性が欠けていた。あんまりあのときは われは非常に張り切っていたから、本質してた とかいうふうになりかねしんでもいけないんと さないでしょうかね。

高橋　やっぱり一つの感覚っていうのかな 変要感っていうのかな、戦争という感覚の中 へ飛び込んでいった。いまの若い人たちには 感覚がないから、自分で感覚をつくって学生 運動とかに自分を結びつけて、それに溺れて しまっている。人為的な工作をしたところで自 分なりの感覚をつくっているはず。わたした ちは、東か不幸か、国家存在というのっぴき ならない感覚の中へ飛び込んじゃったから、 **中野**　メレキシ島では朝から晩までゴクゴ ウという度の音をきき、身近にサイパンの玉 砕などもあって平洋の防波堤だれとか、そ ういう実感が身近にあった。いまになって考 えてみると、何か感覚を錯覚をしいられた ような感じがしますね。

梅原　何のために死なければならないの かという命題は、お持ちでしたか。

高橋　わたしはあったな、やっぱり、最後 愛ね。

梅原　ぼくはずいぶん悩んだ。戦争に行く 前、お別れに恋人のお母さん達のことを、今度

の戦争は文明と文化の戦争みたいなものだと 感じました。この日本の文化を守るために戦 いに行く。そのためならぼくの命は惜しくは ないと思って行ったんですよ。天皇陛下のた めのよいっても、天皇陛下って見たことも死 ないし、だれのために何のために死ぬのかな と考えていた。自分のすべて自の健康のこ とが思い出された。ぼくが倒れるときに千 日千本これたんですよ。あっこんな連隊が いるんだから、この連隊が死ぬなら一緒に死 のうかなと思ったんです。死なないですみま したが、何かやはり責任感じが身近にない と死の実感っていうのは出来ないんじゃな いかな、イデオロギーのためには死ねない でしょうね。

長洲　この戦争のみなさんのお話が、いま の若い人たちって、変人のいい気になった話 というふうに受け取られる向きも、そういう 点は気をつけるのがわれわれの責任でもある と思います。戦争に参加したということも、 わたしたちの二十代、三十代のときの感覚、 死死、いろいろな言葉が出ましても子かとて なりましたけれども、一つの感覚があったこ とだけは確かだと思います。貴重なお話の 人は不幸ですよ。

（了）